

# 史遊会通信

No. 220  
平成 25 年  
5 月 13 日  
発行

事務局  
☎ (03)  
3712-0651  
下山田方

四月講演要旨

## 『新唐書 杜甫伝』を読む

中 込 勝 則

一昨年一月の講演で、杜甫の生涯と詩について、その前半をお話ししたが、今回は『新唐書杜甫伝』を読みながら、後半を中心に見て行く。

彼の若いころの「壯遊」の時代、科挙に二度目も落ちて、長安における苦節十年の時代。やつと念願の官途に就くことができたがまもなく安祿山の乱が起こって捕らわれ長安に幽閉。賊軍の目を盗んで長安から脱出し新皇帝肅宗の行在所に駆けつけ、その功により左拾遺（\*『新唐書』の、「右拾遺」は誤り）を授けられた。しかし宰相房琯の事件で彼を弁護して肅宗の怒りに触れ、華州の下級官吏に

左遷され、暑さと多忙・折からの飢饉で家族の食のために官を辞して甘肅省秦州にながれ、更に同谷から蜀の棧道をこえて成都に飄泊した時代。こんなところが先の講演で、お話しし上げた。今回は彼が成都に落ち着いたとき以降を中心にお話した。

彼が成都に向かったのは、親友の高適・従孫の杜済・何邕など彼の詩の信奉者たちが蜀にいたから彼らを頼ろうとしたのである。

そして彼らの援助を得て、成都郊外に草堂をたて、やつと落ち着いた生活を営むことができた。高適は彭州刺史であったが、彼の生活の面倒を見、さらに蜀州刺史をも兼任する

例会のお知らせ

### ◎ 5月例会

日時 平成25年5月22日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 三戸岡道夫氏

テーマ 日本太古史と空想史

自由執筆者 村上邦治・漆原直子・

平山善之の諸氏

締切 5月末日

### ◎ 6月例会

日時 平成25年6月26日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 千坂精一氏

テーマ なぜ忠臣蔵が持て囃される？

自由執筆者 小田絃一郎・鯨游海・

三戸岡道夫の諸氏

締切 6月末日

こととなつて、杜甫とは詩を応酬し、大變力になつてくれた。しばらくして、是も親友の嚴武が成都尹（Ⅱ長官）として着任した。

これも杜甫には大變ありがたいことであつた。嚴武の後ろ盾を得て生活は安定し、詩風も以前の苦しさを訴える詩から一變して、生活を樂しんでいるさまがうかがえる。

ところが、宝應元年（七六一）に、玄宗・肅宗があいついで薨じ、嚴武は大葬を取り仕切る委員長格で都に召還されることとなつた。

杜甫は彼との名残を惜しんで、彼を途中の綿州まで送つていった。嚴武がいなくなつた隙を狙つて、劍南兵馬使の徐知道が成都で反乱を起し、かれは草堂に戻れなくなり、しばらく綿州・閬州・梓州に遊ぶ。彼は蜀に流れてから時もち、嚴武がいなくなつた蜀にこれ以上いでも仕方がないとおもつて、長江を下り荊州にでて、そこから漢水を遡上して都に帰ろうと計画し、舟の準備までしたが、嚴武が東西兩川節度使としてふたたび成都に着任するという情報を得た。これはこのころ安祿山の乱の鎮圧に吐蕃（Ⅱチベット）や回紇（Ⅱウイグル）の力を借りたため、彼等の横暴をまねき、長安や蜀に彼らの乱入は激しく、蜀の北部が彼らによつて陥される事態な

どがあり、嚴武がその鎮圧を期待されたのである。こうして杜甫は、都に戻ることを止めて草堂に戻つた。

その後、嚴武の朝廷への働きかけにより、その幕下で、參謀檢校工部員外郎（従六品上）に任命された。ところが、彼はすでに老齡で、勤務が負担であつたこと、同僚たちとも合はず、勤務が次第にいやになり、何くれと彼をかばつてくれる嚴武にはわるいが、また、官を辞してしまつた。（\*彼の性格を快く思わない嚴武が、彼を殺そうとしたとの記述は誤り）

そうこうしているうちに、嚴武が四十歳の若さで歿してしまつた。高適はすでに嚴武と入れ替わりに都に召還され、嚴武もなき今、こんどは本当に蜀を離れる決心をし、長江を舟で下つていく。途中、体の不調のため雲安ですごし、やがて三峽入口の夔州で、二年弱を過ごした。この頃が、杜甫の詩作がもっとも多い時期である。（\*「武卒するや崔旰等乱し、甫、梓夔の間に往来す」は誤り。彼が綿州・閬州・梓州などに遊んだのは、既述のように徐知道が反乱したためであり、崔旰が反乱を起したのは、杜甫が蜀を発して、長江を下り夔州にいたことである。）

そして、更に下つて、荊州に行く。ここには従孫の杜位が江陵行軍司馬（Ⅱ節度使副官）をしており、親友だつた鄭度の弟の鄭審が荊州少尹（Ⅱ次官）もいたから、かれらに頼つて、漢水をさかのぼることを図ろうとした。ところが、彼等にはあまり頼れなかつたのであろう。さらに洞庭湖をへて、（潭州Ⅱ長沙）へ向かつた。このころ、潭州兵馬使の臧玠が潭州刺史の崔曠を殺して反乱を起し、潭州もあぶなくなつたので、杜甫は、湘江をさかのぼつて、南の郴州へむかつた。これは母方の叔父の崔韋が、郴州の県令をしていたから、これを頼ろうとしたのである。ところが、耒陽近くの方田駅という所まで行つたときに、大水のため遡行できなくなり、ここでストップしてしまつた。食べ物にも事欠き、十日間近くも食がないピンチに陥つた。このとき、耒陽県令の聶氏が牛肉と酒を贈つてくれ、あやうく餓死からまぬがれることができた。

九死に一生を得た杜甫は、再び湘江を下り、漢陽を経て、都を目指そうとしたが、途中、湘江の舟のなかで歿した。（享年五十九歳）

杜甫は後半生、兵乱多発の中で、やむなく

各地を飄泊し、故郷に帰る望みも実ることがなかつたが、生涯、「奉儒守官」、唐朝の盛衰に思いをはせ、「君をして堯舜の上に致し、風俗を再び惇ならしめん」との志と、弱い人民やばらばらになつた弟妹達の安否を氣遣い、李白はじめ若いころからの友人たちの消息に思いを致した。その生きざまは、「数々寇乱を嘗むるも、節を挺して汚す所無く、歌詩を爲りて、時には撓弱を傷む。情は君を忘れず、人、その忠を憐れむと云へり」と、新唐書が記したとおりであつたと云えよう。

自由執筆

微生高 (びせいこう)

森下 征二

微生高は「論語」の「公治長篇」に登場する人物である。魯国の人で、曲がつた所の微塵もない、直なる人(真直ぐな人)として聞こえていた。「論語」の記載は簡単で、漢字で僅か十九字である。

子曰く、たれか微生高を直と言うか。或人、

醜(けい||酢)を乞ひ、これをその鄰(隣)に乞いてこれを與う。

或る人が微生高の家へ酢を借りに来たが、生憎、酢がなかつた。そこで、彼が隣家から酢を借り、それを融通した所、それを聞いた孔子が、微生高は直なる人だと言う評判だが、本当に直だと言えるだろうか(直ではない、曲がつた人だ)と言つた……というのが、記載の意味だとされている。

孔子の真意は掴みづらいが、朱子を中心とする後代の儒教学者は、次のように解説する。是を是と言ひ、非を非と言ひ、有を有と言ひ、無を無と言ふこと……それが「直」である。従つて、もしも微生高が直なる人なら、生憎だが我が家にも酢はないと正直に告げ、手ぶらでかえさないとならない。

それを、微生高は無いと告げずに隣りから借り、借りた酢が恰も自分の物のような顔をして貸した。これは明らかに、他人の美を掠めて(他人の禪で相撲を取つて)、人に恩を売る(良い顔をして恩を着せる)行為であり、正直な人が取る行為ではない。だから、孔子は些細な行為を取り上げ、彼は正直者とは言えないと説かれたのだ……と。

さて、どうだろうか? 今の感覚で言えば、自分を頼つてきた者の要望に応えるため、隣から借りて融通する行為が、何故、直でないと非難されなければならないか、理解に苦しむ所である。隣人から借りた経緯を知らせれば、却つてお為ごかしのように、その人に言わないで置くのが普通である。朱子らの解説が、果たして孔子の真意を汲んだものと言えるだろうか?

疑問に思つていた所、簡野道明氏が引く荻生徂徠の説にぶつかつた。徂徠は言う。自分の家にもなければ、その人を空しく帰すに忍びず。隣家に乞いてこれを与えたりしは、頗る委曲親切なり(細部まで親切が行き渡つている)と言うべし。故に、孔子は微生高を誇りにしに非ず……と。即ち、孔子が彼を直でないと言つたのは戯れで、孔子の真意は、微生高が徒に直だけの人ではないこと(必要なら直を曲げることが出来る人である)を、言うことにあつたのだ……と。

成程、中国の儒教の学者の説よりも、荻生徂徠の説の方が、現代の我々には遥かにわかりやすい。しかし、本当に徂徠の云う通りだろうか? 孔子の言葉を、もう一度読み直してみよう。

子曰く、たれか微生高を直と言うか。これは非常に強い反語の表現である。この表現からは、戯れの意図を読み取ることは出来ない。素直に読めば、微生高は直ではない。と言っている。孔子は直ならざることを非とし、有るを有りとし、無きを無し。とする愚直さを、是としてるように解釈するのが正しいように思える。しかし、もしかすると、孔子の真意は他の公冶長篇の章にあるかもしれない。次章の一部を見てみよう。

子曰く、……怨みをかくして、その人を友とするは、左丘明これを恥ず。丘もまたこれを恥ず。

通常、これは次のように解釈されている。

或る人を心の中で怨みながら、それを露わに出さないで、怨みを隠してその人を友とすることは、心と行為が相反しており卑劣である。左丘明はこれを恥じたが、丘（私）もまた、これを恥じる者である。と。

これもまた異論があるろう。怨みがあつても、それを隠して交わらなければならぬことは多い。幾ら相手が気に食わなくても、その人を選ばなければ、人間関係が円滑に行

くはずがない。果たして、これにもまた徂徠のような異説がないだろうか？ もしも孔子の考え方が、この解釈の通りだとすれば、微生高についても、朱子らの通説が正しいことになってしまふ。

おそらく、中国では長年にわたり、朱子らの説が幅を利かせて来たのではないか？ 今や、それは個人の問題を超え、政治の中でも見受けられるようだ。しかし、今必要なのは行き過ぎた「直」ではなく、微生高の「委曲」であり、怨みを隠して友とする行為ではないか？ 我々は同じ日本人として、荻生徂徠の人物や事跡を、もっと深く知る必要があるかもしれない。

自由執筆

カスバ

—アルジェの旧市街—

太田 精一

国際見本市参加のため、私は、一九七  
七、七八、七九年と連続してアルジェリアの  
首都アルジェに出張した。いずれも八月から  
十月の夏から秋にかけての季節である。

アルジェは、地中海に面した大きな港町である。当時の人口は、百五十万人。港の背後には、五、六階の白い建物が階段状に立ち並んでいた。その近くに鉄道駅、市庁舎、銀行、劇場などがあり、南仏マルセイユに似た雰囲気を感じさせた町であった。

アルジェは、古代には、イキコムと呼ばれるフェニキア人の植民都市であった。

フェニキアが、ローマ帝国によって滅ぼされた後、イキコムは歴史上から姿を消した。

が、中世には、チュニジアに興ったムスリムシア派のファティマ朝（九〇九—一七一）が、この地を支配し、四つの島を拠点に新しい街を建設している。

島は、アラビア語でアル・ジャザイルという。その呼び名がアルジェとなったのである。

一四九二年、スペインのグラナダがキリスト教徒によって陥落したため、アンダルシア地方からのムスリムの移住者が増加し、アルジェは飛躍的な発展を遂げた。

十六世紀には海賊バルバロスが、アルジェ周辺のスペインの勢力を駆逐してベイレルベイ（オスマン帝国の軍管区長官）として統治

者となった。以来、オスマン帝国支配下では、地中海の海賊の拠点としてアルジェは知られるようになった。

一八三〇年仏軍による占領は、アルジェを大きく変えた。

フランスは、アルジェを拠点としてアルジェリアの植民地化を図り、フランス人を大量に入植させ、ついには行政上フランス本土と同様の地位を持たせ、海外県としてアルジェリアを併合したのである。

入植者の数が増えたとはいえ、二十世紀を迎えても総人口の一割にも満たないフランス人が、政治、経済の実権を握っていることにアルジェリア人の不満が高まった。第一次大戦後、民族運動が起こり、アラビア語による教育、イスラームによる国民の連帯意識の向上が呼びかけられた。だが、入植者の抵抗が激しく、その運動は、ことごとく弾圧された。

第二次大戦後、世界各地で植民地からの独立運動が活発となり、アルジェリアでも、民族解放戦線が結成された。

一九五四年十一月、アルジェリアの各地で武力闘争が開始され、七年半に及ぶフランス軍との戦いが繰り広げられた。六二年三月、

アルジェリアは、フランス政府と調停協定を締結し、念願の独立を勝ち取ったのである。

民族解放戦線の中には、社会主義革命を推進する勢力とアラブ民族主義者がいた。社会主義推進派は、入植者勢力の一掃、土地改革、重化学工業化を標榜し、民族派は、イスラームとアラブ民族主義を掲げた。その結果、社会主義とアラブ・イスラーム化が独立後のアルジェリアの国家建設原理となった。

その後、民族解放軍を背景とする勢力が、次第に権力を掌握、一九六五年クーデターにより初代ベン・ベラ大統領を倒したブーメデアンが軍事政権を樹立した。同氏は、一九七六年に大統領に就任、一九七九年十二月に死去している。

カスバは、民族解放闘争の重要な拠点となった。そのカスバは、アルジェの街の中心、地中海を見下ろす小高い丘の斜面に張り付くように広がっている。

その名は、アラビア語のカサバに由来するマグレブ地方の方言である。もともと中心都市、町を意味していた。後に城塞化した町全体を表わす言葉となったのである。

独立前、アルジェリア人の多くは、このカスバに住み、フランスからの入植者は、その

外に住み着いた。今日では、カスバは旧市街、その周りを新市街と呼んでいる。

私は、かねてから一度、カスバの混沌としたアラブ世界に触れて見たかった。ようやく一九七七年にその機会が、訪れたのである。

カスバへの思いは、学生の頃見たフランス映画、ジャン・ギャバン主演の「望郷」から生まれた。その舞台となった無法地帯に身を置くことよって、不安と孤独と憂愁を肌で感じてみたかったのだ。

「カスバは、治安が良くない。観光客が案内も無く一人で入り込むのは危険だ」

承知はしていたが、周りの人の意見に従い、私は運転手のサイドに案内を頼んだ。

迷路のような階段の通路が縦横に走っているカスバに足を踏み入れた。階段の両脇には、石造りの家が立ち並び、通路には、ゴミや動物の死骸が散乱し、血が流れていた。

しばらく階段を上り、一軒の家の前に立った。サイドが扉を叩くと、その家の主人が出て来て、私たちを中に入れてくれた。扉の内側には広い中庭があり、花壇が置かれていた。中庭を囲んで部屋がある。部屋は、開放たれていて、外から覗くことが出来た。中庭も、部屋も予想以上に綺麗で、清潔そうで

あつた。

部屋の中から子供のはしやぐ声が聞こえて来た。喧嘩が家族の活力を感じさせる。

ふと、唾や痰を道端に吐き捨て、ゴミを放置し、立小便をした戦後間もない子供の頃の記憶が蘇つて来た。

礼を述べ、その家を辞し、頂上に出た。

カスバの頂きから眺める地中海は、青く澄んでいて、港には大型貨物船が停泊していた。

自由執筆

## 江戸時代になる前の数学

佐藤 健一

今までの通説では、和算は江戸時代になってから急速に発達したとある。飛鳥・奈良時代に伝わってきた中国や朝鮮の数学は室町時代には失せてしまった、としている。

確かに日本の数学は江戸時代になってから急速に発達した。このことは疑う余地はないのであるが、室町時代や織豊時代に数学のわかる人がいなかったとするのはどうかと思う。

江戸時代に刊行された『算法童子問』（村井中漸、天明三年）の算学淵源に「中古、戦国に及びて、九章の学、随つて地に落つ。士は軍に老し、民は流離に苦しみて、割算を煩なりとして用ひず、ただ乗算のみ行う」と記している。

江戸時代前の数学を書いた書は『算用記』『割算書』であるが、この二つの書はいずれも江戸時代になってから刊行されたものである。この二つの書よりも早く書かれた書に「三尺求図数求路程求山高遠法」「吉田流算術」がある。最初の書は三尺四方の板と物差により、遠方にある物までの距離を求めるための表である。同様の方法で高さも測れることになる。これを書いた人は吉田宗恂といひ、筆記したのは子の如見である。宗恂は一六一〇年に亡くなっている。慶長五年から号を意安にかえたが、それ以前は意菴であった。「三尺求図数求路程求山高遠法」には意菴とあるので、慶長五年以前と解釈できる。

「吉田流算術」は角倉了以に学んだことを弟子の吉田光由が書いた、とある。角倉了以は一五五四年生れ、安南国（ベトナム）との朱印船貿易や大堰川、富士川等の疎通や高瀬川

の開削などで知られる。

この二人は医師の宗桂の子で、宗桂の長男が了以で二男が宗恂である。宗恂は医師になった。徳川家康の侍医として江戸に屋敷を賜っている。

吉田光由は幼小の頃に毛利重能の塾で数学を学んだ後に、了以に学んだことになる。毛利があまり理解していなかったと思える「開平法」や「開立法」を『塵劫記』で書いているが、これは「吉田流算術」の「開平法」や「開立法」に極めて似ている。

今年の五月十二日京都の小倉山二尊院で「角倉了以翁四百年忌法要」が行われる。

五月の講演要旨

三戸岡道夫

明治時代から大正にかけて木村鷹太郎という民間の歴史学者がいた。日本太古史という膨大な著書を出し、日本の源流はギリシヤであるという説をとねえた。これに対し歴史学者が批判したところ、木村鷹太郎は歴史学者を、資料のみにへばり付いている無能学者と大反撃をし、学者たちから「キムタカ」（平成のキムタクではない）と恐れられた。